

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第28回 入院から学ぶこと その③

他にも入院から学んだことがある。ある日、緊急入院してきた患者がいた。吐血した患者らしい。その晩の出来事だった。午前0時を過ぎたこと。その晩の出来事だった。午前0時を過ぎたこと。その晩の出来事だった。午前0時を過ぎたこと。

相部屋に介護者が泊まり

ろ人の話し声が聞こえる。こここそ話した。それにベッドのきしむ音。ギンギンとうるさい。夢でも見ていたのだろうか。自分を疑った。でも何だか様子がおかしい。聞き耳を立てた。

付添いの人が添い寝をしているらしい。4人部屋に5人。車で言ったら積載オーバー状態だ。相部屋に介護者がいる。この様な体験は初めて。ものすごくうるさい。真夜中の出来事だった。こんな事があるって良いのだろうか。看護師からは事前になにの話しも聞いていない。同室の他の皆さんも煩わしかったのではないかと。昨晩は眠れずに長い長い夜だった。

なんだか無性に腹が立ってきた。翌朝クレームとして看護師に伝えた。どう対応するのか。TQ M(トータル・クオリティ・マネジメント)の評価についてどう考えているのか。

初期対応はまずまずの速さだった。事実確認から始まり、話しは医療安全管理室に回され、担当室長と総務課長が出てきた。その対応の仕方が私を唖然とさせた。

ある部屋に呼ばれたが、私が入って行っても起立がない。言い訳からスタートし、謝りはそのあと。名刺の提出もなし、今後に向けての取り組みの話も無し。あげくに同室者と仲良く助け合うことを依頼された。

今回の入院は病院運営の在り方を考える大きなチャンスであったことは確か。このときFFJCP(がん患者会会議)から良報が舞い込んできた。来年開催されるFFJCP2017に向けて、今年中に分科会を開きたいのでエントリーしてほしいとの依頼メールだった。テーマは「患者中心の医療を考える」で患者・家族が院内運営へ主体的に参画する必要性について議論することだった。

まさしく今回の入院が大きな学びとなった。何というタイミングのよさだろう。「天は我に味方あり」の心境である。